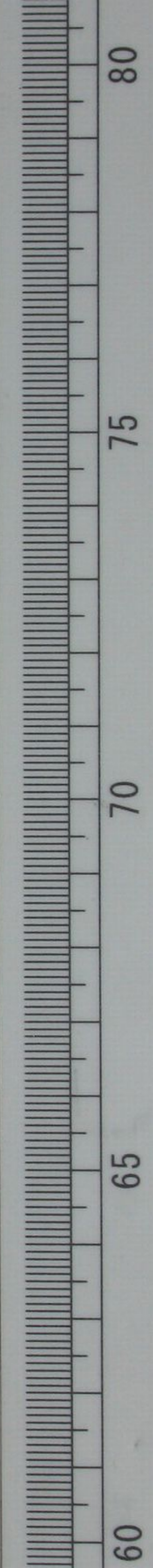
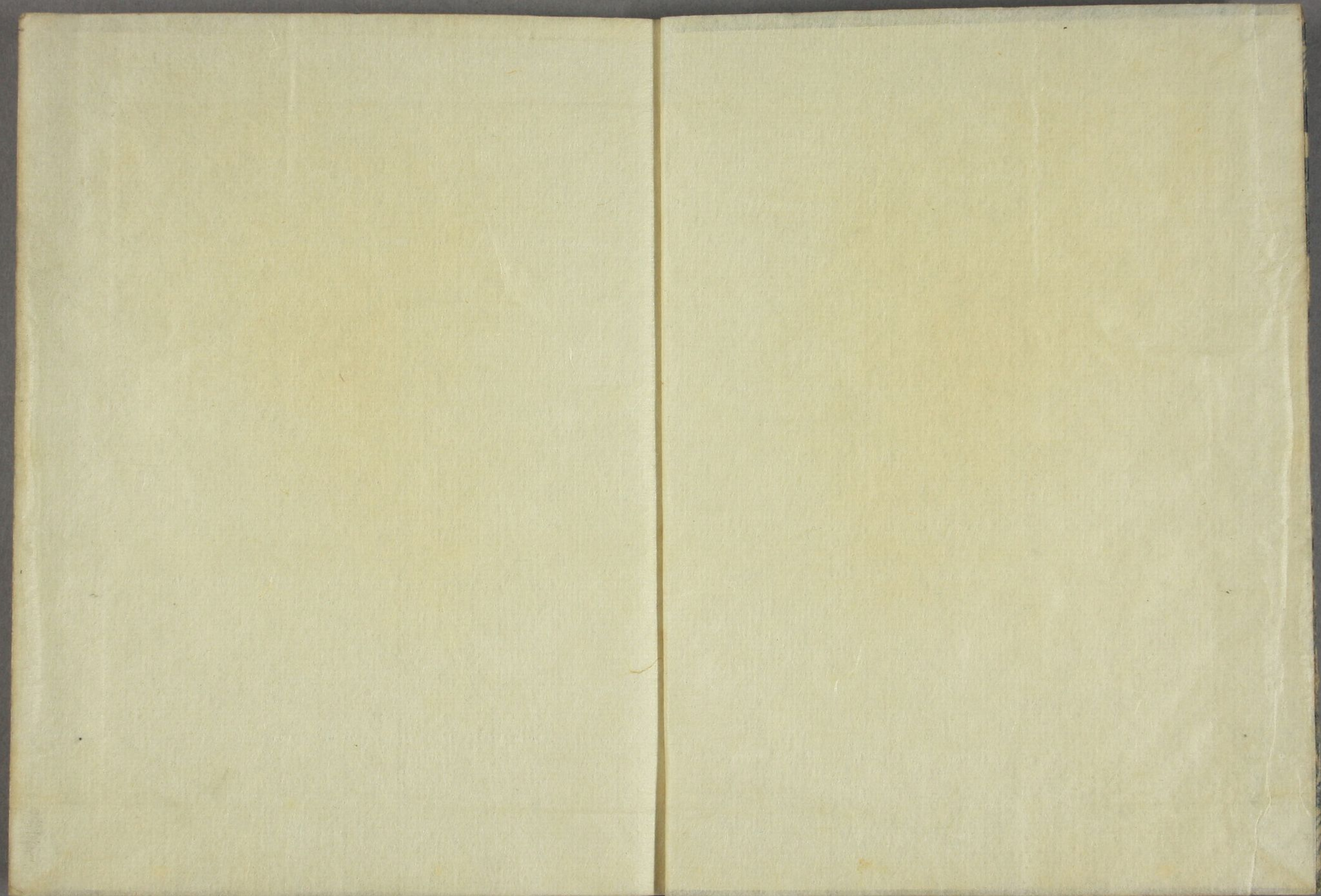




法
系
の
し
り

中村俊定文庫
文庫 18
820







月日未だちあし文政乙酉の暮
 松くおぼそ道えんや日行二人
 陪之びむしき入く辛洲まで
 送しはち先泊しは暑くは松とぬを
 杖より高鉾を越え又の路はと
 水戸街道を帰ふ今既
 之とゆあさなり其増を
 前編してあけぬ



蝶のうき道かけてゆくまは 翠川

えまきや四五ふみ跡もなき 其破文 米府

前途の子里村を

日しそ松をみ一見の志は

翠川米府の両士を帝

河崎を来ておはす

帝の御下は御下は御下は御下は 椿堂

早稻種をまき採りて餅搥て 米府

人々来りて参る門板 四作

月影の道く低き浪女と 曹品

牧又肥ゆるわあき風 松園

度はしる椽の菌を押なす 高瀬

ふれし月を夢をばはる 笠山

よみつひの夢をばはる 本焼

清枝竹あとりし葉のさか

蚊山

瓜の皮にけりあはるる

老破

室橙の葉よかゆふ伏

苔中

いろしよのく月お下ぬき

白菘

柔竹白ひをそく捨つゆ

龜六

神楽の舞こゝ入る裏おけ

推己

百もほろひもあつめ著き

堂

むねのよきしめぬお逸言

省共

もつた柄よりいすのき

烘石

右一順

各送あひあつ略

甲を五ふとあつあつ一うま

あつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつた

苔中

良興錢分

あつたつたつたつたつた

桂堂

海

子代倉の門はわんわんわんわん 嬰門

小坂の中

堀の言はつてはわんわんわんわん 采府

新くして

笑梨子城がこゝろはわんわんわん 芸中

田子海

ゆふゆふ海をたふさるこゝろ 翠川

はなやてはむさねはわんわんわん 芸中

管根

馬のくま湖へ下りてはわんわん 全

東都よきて清れさを付入

中よきまはのほちりわんわん

下総の松原よちりわんわん

な〜とさぬ

糸白申のこゝろはわんわん

杖を曳杖戸幸をたむるさ本ま

外ちし柿の虫をたむるさ本ま 梨川

麻呂街道よ入る右又國ふ寺

ふえう置よふる

池あよみさふちううまき芒 米府

室おの峰をたむるさ本ま

はしちしははく

日光山御神祭拜

大地の洞よ高たきやうう水 梨川

るはよううい海や二地ふま 表申

夏ふちさよふつくはくう 米府

高角氏をたむるさ本ま

ハ懐まよ信殺生石を憐す

蔓又子根をくし石の若し 翠川

芦野

赤ううて葉持たなり柿皮 表申

くらくらとくさくさする白河や 米府

能因のを撫の舞や多楓 翠川

何武隈川

池あのをくくくくくくくく 菅中

げあふたき田とたききき

沼をの寺こも極くつて哉 全

五十巴くくくくくくくく入

来り実を噓くくくくくくくく 粟川

けくくくくくくくく本原 未府

鯖

醫王寺や妹やうたの根つて 菅中

昔お松原を尋来折の驛よむ

りたの石よおるらたりのお田ん

とくな一にたてく入里よとんけ

遊くあやの産機あひの月哉 粟川

大木戸

坪を傾や田植をなすの歌

全

中さし由植の時溜る海を造て

涼浅の浦なく振舞とかや

木が葉をさく除穢麻走らる田植 い 米府

武隈の松とさくさく昔の花 翠川

盆多々匂なり廿七日仙意入

四ッ辻や人を木が回す郭云 米府

瓶形養をよ

よみそく耳はくはげん雪隠 雄河

あそ卒内よ後ましくさ 翠川

舟人の家後ましくさ 太原

芒の瘦をかこむ葉垣 新玉

きめの心をね手よなしくて 米府

木免秋をうしろ向う 吉申

右一順余畧

躰躑ろ丘の兼店よ遊ふ

松崎とてさへ文城ゆの侍一は 若中

早月報口ゆまきつて市川

壺の碑よいしれ

一子之百里古つらつて時を 翠川

控電の六社和泉之節とて

を燈つにそ待つ町よ下りて常々

坂尾始て幸休に合ふ全うい 全

改尻や松の口休して行葉 米府

軒下より舟うへへ子笑は海也

のまほしきな程なく松葉の如く

留心の扱さるる侍境の如く

古人の笑つてゆへとよめりしを

うかきつれまよふ松葉の如く

瑞志精舎の指扇をよ伯

口はしきしなまらしていさか 翠川

松崎やけふしらを杖え 米府

ゆきい五六きよう 雄鳥よけう

舟こて 檣竈よき 舟人か

うきまにさして

まのあやぬしけうし 船口 書中

野田の玉川末の松と 幸なまを

白うき城をけう 舟かきけう

何日飛う思いはまきま 信こし風の

後馬よ首を思ひき 宿山よあうて

蒼天よ町をたうき 懺られ 粟川

高雄を薬し 佛眼寺よあう

木の下菜ゆし 詣を城かのけう

二朝菜をけ一献々 洛玉の涼切

まけけ乃まはしり

岸の路玉亭よ 招うれく

かきくやまにあう

菅蒲葺日武幸やむつれ町 粟川

舟よと初か幸うはる麻のぬ 米府

六日入しは時こくおるる入

夏多花ちよこさぬ地馬哉 粟川

大原より海原をゆく未續よせ

荒原や白浪よせてさつら 粟中

数城の橋大よせしる本よ泊る

那川の駄家坐ら常陸こく

三日おちし泉流火とさうて

海幸は縁の傷ちふ清あま 米府

水戸島町よるる翌日筑波を

休して湯袋とく世同は清う

松火のうまよ一板試ある

豊坂よまむけをいねし一板は 粟川

東言をちかひよまらけは

みーく休やねらば美あは後は 米府

眼のまよひをさかちてはくさる
翠川

大木をよ下りて例の葉店より

霞の海鏡子をゆねて一そく

燕の語りまは跡ゆく小川

お本回氏を討いまはる一戸

息撫成田は詣り遠舟は笑て

五百石儀はあつた

栞母婿やまをくさるきり傳
米府

東武は度く一日ハ菓本子

おのゝ様をさへる

櫛打てきけいあ舎りう歌
翠川

とらうも成きて

月よりぬく木の松さる雨
蕉雨

むかしし物やあともをうて
米府

糸ねやうののみふかとうる
雲中

灯を並ぬと月おすの光 府

若菜をさうくけける雄の突 川

七種の秋をそをぬる外や 中

そと時こそなご恨むあふ女 府

さかよひを憂も探る一 府

牡丹うさきおませを造るぬ 才

念のいぬおきこえらうみ坊 府

主徒みまする舟おとし 府

冷やう月おす一さるに 川

身代いぬら麻のけらえ 府

稻本お上あそく 硯 管 府

万代をの掬おとや記え短 川

花苗を植るけらうと守る入り 府

ゆきとあひむる采をす 中

下略

六月五日品川をさるる道一里

謙々此案内さくやね 磐 翠川

鳴やこれ禮よきき木下乳 善中

青々所

乳きけと花先とんきぬ宋子音 阜池

葛花えんく山 卒と教 米府

夜夢徳とよと連をさくさえて 翠川

くねのちち七又ね月 善中

ホーは又はきてぬ立物ありし 府

法成まらるるおきふもちく 川

大日一行かよぬさち向く道 池

ほろけさけききき 癖 府

緩けよ人を引込賽仲間 中

わろ新さぬ恋のあけさ 地

よんがた星のねいぬき 府

却を重ぬ一雉子也高を
 中
 齒采折又出せと心の憂催し
 池
 供おほくあまをちるか
 府
 多しは是秋の冠れ病成さ
 川
 かくても様へまき物系
 池
 月々中おほなるよう様もふ
 中
 別てましかのよふ浪泉烟
 川

下畧

篇よきこと

土着よれをすさう不二龍波 米府

道くすし徳吟ハ後編よ譲りて
 記る書中法所書し記行の形古
 取支まふも高鏡よりか
 亦くお白紙追加

高館平泉

神保や鎌倉彫れ及びの上 中

美羅川滝産糸たりの色田村

九義衣旧跡栗駒ヶ嶽寺

松はー

下ふれは保たしてや呉れを

出羽の園は木々之石寺の詣

湯殿山の麓垂清小をよ泊る

黒けくや湯殿のそら岩の山

羽黒山は坊中ま〜

杜恙骨良う柱しう南谷

あけみしや依ぼより西は入口乳

象写勺なり

岩穴はす凡く木一矢葺板

聖澤城下亭あり

橋為て二階をふしの暑さい

文政11

篠原ハ懐を宝物かほし
越氣比の社をおし近江
をホしと帰りぬ

戊
子春

